

## 論文要旨説明書

**報告論文のタイトル**：当事者主義における裁判官の関与と訴訟当事者への影響

**報告者・共著者**（大学院生は所属機関の後に（院生）と記入してください。）

**報告者氏名**： 池田 康弘

**所属**：熊本大学法学部

**共著者 1 氏名**： 細江守紀

**所属**：熊本学園大学経済学部

**共著者 2 氏名**：

**所属**：

## 論文要旨（800 字から 1200 字、英文の場合は 300 から 450 語）

本論文の目的は、裁判のやり取りの中での各当事者の相互依存的な状況とそれがもたらす効果について考察するものである。裁判においては、原告と被告の主張立証が、裁判官の判断に影響を与え、裁判官の初期見解や能力が原告と被告の主張立証行動に影響を与えるという相互依存関係が存在すると考えられる。

民事裁判では、紛争当事者の意思を尊重し、当事者間での解決をまず求めるということが原則である。裁判官はその意味で補助的な存在である。この理念は民事裁判の当事者主義と呼ばれるものであり、私的自治を基礎とする民主的な多くの国における裁判の基本的原理である。民事裁判において、裁判官は、双方当事者が提出した証拠に基づく主張、立証、言い分を良く聞き、それらをもとに判決を下すのである。法の理念は上述のとおりであるが、しかしながら、実際のところ、裁判において双方当事者から出された証拠や言い分について裁判官は即座に理解できるのかという素朴な疑問が湧き起こっても不思議ではない。裁判官とはいえ、専門的な内容の紛争は何かしらの行動、例えば、内容理解のための資料収集を行ったり、文献の読解に励んだりして、調査、研究に励むのではないだろうか。そのようなことがあるのであれば、裁判の中で、そのような相互依存的な行動によって下される判決が原告有利になったり、被告有利になったりするかもしれない。それゆえ、裁判のやり取りの中で、各々の当事者は相互依存的に各々の行動に影響を与えていることは至極当然である。すなわち、裁判の中での原告被告の主張、立証が裁判官の判決に影響を与え、また、裁判の中での裁判官の関与が原告被告の行動に影響を与えるということが考えられるのである。

本報告では、原告、被告、裁判官の三者の行動が互いに影響し合っている相互依存的状況においてどのようなことが起こるのかということについてゲーム理論とミクロ経済学の分析手法を用いて考察を行う。具体的には、上記の裁判官の能力の優劣をモデルに取込み、また、裁判官の先例拘束性、さらには裁判官自らの初期見解への頑なさ、そして紛争当事者の裁判における裁判官の判断を踏まえた行動などをモデルとして定式化する。